

筑波山における観光登山道の植生荒廃

木村祐介（地球環境科学専攻）

目的

筑波山における山頂連絡路を中心としたエリアの植生崩壊、土壌浸食を調査する。ロープウェイの女体山駅からケーブルカーの筑波山頂駅の区間の利用客が一番多いと考えられるエリアを選定した。区間は550m（女体山山頂まで）とし徒歩にて調査を行い、目視で確認するものとした。手法としてはGPSを用いて、登山道に露出した根をポイントする。

調査方法

調査日 2016年2月4日（晴れ）

調査場所 山頂連絡路

主に、筑波山ロープウェイの女体山山頂駅から筑波山ケーブルカーの筑波山山頂駅の登山客が一番多く行き来する山頂連絡路を中心に調査を行った。調査にはGarmin社製etrex10Jを使用し、泥濘の起きやすい場所や木の根が登山道へ露出している箇所をポイントとして印した。これらの結果にもとづきDEMやLandsat衛星画像を用いてQGIS上で解析を行った。



写真1 保護ロープ柵

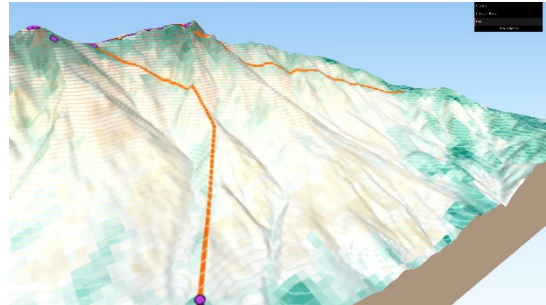


図2 Landsat と 5m メッシュを用いて算出した落葉広葉樹の分布図（山頂付近の緑色の値が落葉広葉樹の分布エリア）



図2 観測ポイント地点

結果・考察

4箇所エリアで根が露出している箇所が確認された。2箇所は完全に露出しむき出しの状態になっていた、他箇所は一部分が露出している状態であった。このことからロープ柵が大きな保護効果を果たしていると考えられる。しかしながら、このロープ柵は幹にワイヤーで結ばれているため、ロープの意図を知らない登山客が手すりとして利用している場合があるため、木を痛めることが懸念される。筑波山は観光登山としてだけではなく里山なので、人と自然が豊かに育む景観や生態系をこれからも維持してほしいと願う。